

人物 河原

男

僧侶

少女

西浦

少年

女

車掌

都内、ある駅のバスターミナル。そのうちの一つのバス停留所。  
デジタル時計付きの標識、屋根、ベンチ、そして屋根から少し外れたところに灰皿の  
あるバス停。  
夜。

河原が現れる。

河原 (電話を耳に当てながら) ハイ。ハイ。じゃあ、明日の正午、駅に担当の者が向かい  
ますので、その時に受け渡しを、よろしくお願いいたします。ハイ。ハイ。では、失  
礼します。……(電話を切り、しまう)。はあ。

河原、ため息をついて、バス停のベンチまで向かい、座る。

河原 (腕時計を確認して) 早すぎたな……

バスがやってくる。

車掌 えー、こちら……。なんだっけ……。ああ、○○循環。××駅前です。

バスの扉が開き、大きな壺を抱えた男が降りる。

男 はあ、重い。

男はため息をつくくと、河原の隣に座る。

車掌 乗りませんか？

河原 え？ああ、すみません！乗らないです。

車掌 かしこまりましたあ。

バスが発する。

河原、ポケットからタバコの箱を取り出し、立ち上がる。

男 タバコ、お飲みになるんですか？

河原 え？ええ、まあ。ちよつとだけ。

男 一日にどれくらい？

河原 一箱くらいですかね…？

男 今日は雨が降るといふ予報です。その灰皿は使わない方がいいでしょう。

河原 そうでしたっけ。まあでも今は晴れてるし…。

男 重そうでしょう。

河原 (立ち止まったまま) はい？

男 灰皿にしてしまっても、いいんですがね。

河原 ああ、いえ(タバコをしまう)。

男 これ、いくらしたと思います？

河原 その、壺？ですか？

男 ええ。

河原 二十万とかですかね、へへ…。

男 二千万です。隣国の古物商でおよそ十二年前に購入しました。

河原 はあ…。

男 安いと思ったものですよ。こんな超一級の芸術品が、二千万ぼっちで売っていたんですから。

河原 (申し訳なさそうに、ペコペコして) あの、長くなるなら、吸ってもいいですか？

男 どうぞ、(壺を差し出して) 使いますか？

河原 イヤイヤ！(ベンチに座り) やめときます。

男 私は全財産を叩いてこれを買ったのです。数年後、これはその価値を何倍にも膨らませるだろう！そう思って。

河原 いやあ、すごいっすね。僕なんかとてもとても…。

男 しかしコレは呪いの壺だった！私はこの壺のおかげで職を失い、妻と子をも失い、家も、着るものも失ってしまったのです。

河原 いや、まあ。夫がそんな買い物したからじゃないっすか…。

男 (河原にズイツと近づき) 今何か？

河原 い、いえ。何も。

男 この壺は、吸い取ったのです。私の幸せを。

間。

河原 売ればいいんじゃないですか？

男 あなたが買ってくれるのなら。七億で。

河原 まさか！そんな金ありませんよ。

男 さつき言いましたよね。「その価値を何倍にも膨れ上がらせる」と。

河原 はあ。

男 事実、私の読みは当たっていました。

河原 ほらあ！

男 六億です。名のある古物商に視てもらいました。それも一軒や二軒ではありません。

全員が口を揃えて言います「コレはウチじゃ扱えないなあ」！……おそらく、今もまだコレの値は上がりつつあるでしょう。当然です。私の家族に対する愛は、百や二百積まれた程度のものではないんですから。

間。

河原 あの、なんで少し盛ったんですか？

男 はい？

河原 いやだから、六億だって言われたんですよね？どうして七億で売りつけようとしたんですか？

男 当たり前じゃないですか。一円でも高く売れるなら。

河原 現に売れてないんでしょうが！

間。

河原 あの、そもそもなんで持ち歩いてるんです？

男 今日も行ってきました、査定に。

河原 結果は？

男 六億八百万です。現在進行形で高くなっているんですよ。

河原 誤差なんじゃ…。

男 誤差？八百万が誤差だというんですか！

河原 いいえ、言いません！

男 ……タバコ、お飲みにならないんですか。

河原 ちよつと今はいいかなー、なんて…。

男 残念です。  
河原 ご自身で吸われては？  
男 いえこれは、壺ですから。  
河原 はあ。  
男 花瓶にいいんです。ハッハッハ。  
河原 ハハハ、ハッハッハ。  
男 何がおかしい！  
河原 いいえ、なにも！おかしくありません…。

間。

河原 あの、私次のバスを待つので、また今度。あは、あははは。  
男 どうぞ、お待ちになったらよろしい。  
河原 言いくいんですけどね、タバコを吸いたいですよ。  
男 飲めばよろしい。  
河原 タバコ飲むって言うのやめてもらっていいですかね…。気になるんで。  
男 いや失礼。

間。

男 これ、中に何が入ってると思いますか？  
河原 さあ…。  
男 あてずっぽうでもいいですよ。  
河原 愛とか勇氣とか？  
男 あなたがそう思うなら、そうなんでしょう。  
河原 もういいです…。じゃあ。  
男 待つてください。  
河原 なんですか。別に打ち解けてないですからね。  
男 査定の帰りだと言ったでしょう。古物商の店主が面白いことを言っていたんです。  
河原 はあ。  
男 この壺に手を突っ込むと、今、自分が望む情報を何でも手に入れることができる。しかし！やましい心があると、ひじから先をかみちぎられてしまうと…。  
河原 それって…。  
男 そう。名付けて「真実のロコミ」！  
河原 もういいです。  
男 そうそういわずに、ほら。

と、男は壺を差し出す。

河原 え、僕が？

男 他に誰がいると。

河原 いやつすよ、怖いし…。

男 まさか、何かやましい事でも？

河原 いや…。

男 ならいいじゃないですか。一度くらい。

河原 あなたが先にやっってくださいよ、そこまで言うなら。

男 まあ、一理あります。

河原 そうでしょう。

男 では…。

男、壺に手を入れる。

河原 ……どうです？

男 ……。

河原 ……。

男 (壺から握った手を出す) ……。

河原 なんですかそれ。

男が手を開くと、四つ折りにされた紙がある。

男 (紙を開いて、見る)「いいことあるよ」。

河原 ばかばかしい。

男 いやいや。私は何もしていない。

河原 はあ…。じゃあ、やったらすぐ行きますからね。

男 分かりました。

河原、壺に手を入れて取り出す。

手には四つ折りの紙切れ。

男 さあ。

河原 (紙を開いて、見る)「今日は、徒歩で行くべし」？

男 お出かけですか。

河原 アルバイトですけど…。

間。

河原 いやまあ、歩きでもいいんですけどね。やる気が出なくて。

男 どのような仕事を？

河原 いえ、ただの、倉庫作業つすよ…。

男 そうですか。素敵な仕事じゃないですか。

河原 いや別に、こっちの仕事はいいんですけどね。

男 私なんか、無職ですから。

河原 壺があるじゃないですか。六億の。

男 六億八百万です。

河原 はあ。

男 買い手がなければ、ただのガラクタですよ。

河原 無いよりは…。

男 いいじゃないですか！働ける場所がある。例えばそれがどんなに悪辣でも、汚れていても、金のもとに人は平等です。ナニを手に入れたならば、ドレを失うのか。物か、金か、時間か、人か。そのバランスを見失わないことです、私のように。

間。

男 そろそろ次のバスが来ますね。都会のバスの便利なこと。それでは。

バスがやってくる。

男が去る。

車掌 えー、こちら…。なんだっけ…。ああ、〇〇循環。××駅前です。

バスから大柄の僧侶が下りてくる。

笠を深くかぶり、軽くはだけた袈裟の下にはジーパンとヨシャツが見え、スニーカーを履いている。

手にはスープの空き缶を持っている。

僧侶はバスを降りると、バス停のベンチに腰を掛ける。

車掌 乗りませんか？

河原 え？ああ、すみません！乗らないです。

車掌 かしこまりましたあ。

バスが発する。

僧侶は笠を脱ぐ。と、その僧侶が黒色人種の男であることがわかる。間。

僧侶 めずらしいかい？

河原 ハイ？

僧侶 そんなに珍しいのかって、聞いてるんだよ。

河原 ええ、まあ…。

僧侶 原宿とかによくいるだろ。坊主の癖に色気づきやがって。

河原 え？

僧侶 知らないのか？無知な野郎だ。頭蛇行っていうんだよ。

と、僧侶は河原に空き缶を差し出す。

間。

空き缶をひっこめて、置く。

僧侶 しけた野郎だ。

河原 修行中ってことですか…？

僧侶 修行じゃなかったら、こんな格好しねえよ！

河原 あまり修行感が無いですね…。

僧侶 何だと！？

河原 いいえ！

と、僧侶は空き缶の中から四つ折りにされた紙を取り出す。

河原 まだだ…。

僧侶 なんか言ったか。

河原 何でもないです。

僧侶は、取り出した紙を開き、読み始める。

僧侶 「頭蛇行とは、衣食住に対するどん欲を払い落とすための修行である。」

河原 落せてないじゃないっすか。

僧侶 これでも大変なんだぜ。修行は労働じゃない。対価がないから、金もない。全部貰い

ものだ。

河原 あのだ。

僧侶 なんだよ。

河原 タバコ吸ってもいいっすかね…。

僧侶 タバコだあ？おまえさあ、無神経というか、気が利かないというか。

河原 あっ、吸いますか？

僧侶 吸わねえよ！坊さんにタバコ勧めるバカがいるか！

河原 ですよ…。

間。

河原 (立ち上がり) じゃああの、俺、用事があるんで…。

僧侶 お前さ、悪いことは言わねえよ。タバコなんかやめときな。

河原 え？いや別に…。

僧侶 座れよ！座れって！

河原 ハイ…。

と座る河原。

間。

河原 え？

僧侶 ふう…。。いや、俺もさ、偉そうに説教垂れるほどの坊主ではないのよ。修行中だし。

河原 はあ…。

僧侶 お前さ、俺の事なんで坊主だと思った？

河原 え？

僧侶 だからなんで、俺の事を僧侶だと思ったんだって聞いてるんだよ。

河原 自分で言ったからじゃないですか…。

僧侶 そうか、実は言っただけでなかったが、本当は坊主じゃなくてシェフなんだ。

河原 はあ…。

僧侶 信じてないだろう。そりやそうだ、なぜなら俺は今、袈裟を着ているからな。

間。

僧侶 分かった。(袈裟を脱ぎ、Tシャツにジーンズの姿になる) これでどうだ。

河原 お坊さんには見えないっすね…。

僧侶 まあそうだろう。



河原 ボクサーとか言われた方がしつくりきますよ。

僧侶 それなんだよ！

河原 ハイ？

僧侶 つまり、その人が「何であるか」より「どう見えるか」。気にしてるくせに、気を遣えていない。お前、いい年して半グレ集団の下っ端みたいに見えるぜ。そういうオーラがある。

河原 オーラですか…。

僧侶 こう見えても僧侶だからな。邪気が見えるんだよ。

間。

河原 またまたあ！

僧侶 ほら（と、空き缶を差し出す）。

河原 （財布を取り出し、五円玉を入れる）

僧侶 おう。

河原 え？冗談のつもりなんすけど…。

僧侶 いいんだよ五円玉でも、万札でも。金の上に人は平等じゃない。俺にとっては、ありがたい五円だし、お前にとっては冗談の五円だっただけさ。

僧侶は袈裟を着なおす。

僧侶 ところで、お前何やってんだ？

河原 え？

僧侶 こんなバス停で一服せずとも、駅前なんだし、もっといい喫煙所くらいあるだろ。

河原 アルバイトまでの暇つぶしですかね…。

僧侶 今日は雨が降るとか言ってたぜ。

河原 なんて知ってるんですか。

僧侶 スマホくらい持つてるだろうがよ。

河原 ……。

僧侶 いいだろ！あ？

河原 いやなんも言っていないですよ。

僧侶 しかし、駅前のバス停だというのに、人の少ないことだ。

河原 この時間、このバスに乗る人はほとんどいないんですよ。この一帯を循環するだけですし、ボートレース場とか、倉庫地帯を回るバスですから。

僧侶 稼げねえじゃん。

河原 それに、これだけ騒いでたら人も寄ってこないっすよ。

間。

僧侶、男をじろじろと見る。

河原 なんですか…。

僧侶 悩み相談とかしてやろうか。

河原 そんなに金持ってないっすよ！

僧侶 バカたれ！金目当てに見えるのか！

河原 他に何が！

僧侶 これでも修行中の身だぞ。一円からで受け付けてやる。

河原 ……。

僧侶 (河原にグイッと近づき) 言いたくないなら当ててやろうか。

河原 ……。

二人は至近距離で顔を突き合わせたまま。

間。

僧侶 ふむ！（と、河原から離れる）

河原 分かったんですか？

僧侶 いたって簡単だ。仕事辞めればいいじゃん。

河原 え？

僧侶 倉庫のバイトじゃねーよ。なんかもう一個やってるんだろ？それをやめりゃいいんじゃないやねーかって。

河原 いやでも…。

僧侶 別に、やめたくないのなら、やめなくてもいいんだけどな。

河原 どっちなんですか！

僧侶 儲かってないんだろ？ぶっちゃけ。

河原 悪いんすか？

僧侶 いや！お前に限っては、儲かってない方がいいんじゃないか？

間。

僧侶 金のもとに人は平等じゃない。お前がどんな人間を相手に商売してるか知らんが、きつとそいつらの百万円は、お前にとって百円くらいだよ。

河原 そうですよ…。

僧侶 オーラを見ろよ、直接じゃなくてもいい。電話越しに、そいつのオーラに注視してみ

ろ。……大切なのは見た目じゃない、実際にどうであるか、本質だ。ボクサーみたいな男が袈裟を着ているという違和感。それを受け入れる。租借しなくてもいい。口の中でねっとり転がすんだ。舌と、歯と、唇だけで探れ。そうしたら吐き出すも飲み込むもお前の自由だ。

河原 ……………。

僧侶 目をつぶってみろ。

河原 ハイ…（目をつぶる）。

僧侶 今目の前にいるのは、お前の最も嫌いな奴だ。上司、先生、取引先、同級生、政治家やタレントでもいい。あるいは家族か、自分でもいい。

河原 ……………。

僧侶 そいつを手のひらの上に乗せて、ギュっつとしてみるんだ。

河原 ……………ギョッ（何かを握るジェスチャー）。

僧侶 そう、ギュッギュッギュッ。おにぎりみたいな感覚でいい。

河原 ……………（握り続けている）。

僧侶 握れたか？そうしたら、一気に頬張れ！

河原 （握ったものを口に含む）

僧侶 そのままだ、絶対に嘔むなよ。

河原 （口を膨らませたままうなずく）

僧侶 なめてみる、ゆっくりだ。

河原 ……………。

僧侶 まずいか？そうだろう。なんて言った手嫌いな奴だからな。だがもう少し続けるんだ。

河原 ……………。

僧侶 味わったか？

河原 （首を縦に振る）

僧侶 出すか？飲み込むか？

河原 ……………。

間。

河原 （何かを吐き出すしぐさ）はあ！はあ、はあ…。

僧侶 どうだ？

河原 （息を切らしながら）意味が分からないです…。

僧侶 飲み込めたならそれでよし、吐き出したならそれもよし。

河原 何がわかるんですか、これで。

僧侶 何もわかんねえよ。

河原 はあ？

僧侶 分かれようとするんだ。今のを通じて。

河原 ……。

僧侶 何かあるたびに、試して盛ればいい。しらない、分からない、考えられないことに遭った時に。

河原 ……ハイ。

僧侶 じゃあ、そろそろ行くわ！ここに居たんじゃまるで金にならん。

僧侶が去る。

河原 あ、お金……。

バスがやってくる。

車掌 えー、こちら…。なんだっけ…。ああ、〇〇循環。××駅前です。

バスから派手な格好をした少女が降り、ベンチに座る。

車掌 お客さん、乗りませんか？

河原 え？ああ、すみません。

車掌 かしこまりましたあ。出発しまあす。

バスが去る。

間。

と、少女が立ち上がり歌いだす。

少女 一つ、人世の怨みを孕み。

二つ、不安の種がはじけて。

三つ、醜い怨念疑念。

四つ、寄り添う心も虚しい。

五つ、怒りに包まり眠る。

六つ、矛盾を涙で刻み。

七つ、内々融けて組まれて。

八つ、焼かれる命もあらん。

九つ、後悔するのも遅く。

十で、とうとう真つ赤に染まる。

間。

少女 若くして殺された少女の魂が宿る、西洋人形系地下アイドル！「セレスティアル・ドールズ」のリーダー、ジュエちゃんとは私の事だああ！ボンジュール？ボンジュール？ボンジュール？

間。

河原 (両手で何かを握るしぐさ、そしてそれを口に含み、吐き出す) 説明がくどい。  
少女 ひっどーい！ぱんちぱんち。

河原 子供はもう帰った方がいいですよ…。

少女 子供じゃねーよ！今年で26だわ！

河原 え！じゃあほぼ同じじゃないですか…。

少女 お！いくつ？

河原 31っす。

少女 全然違う！悪いけど一緒にしないでオジサン。と言うかなれなれしすぎない？オフなんですけど今日。

河原 はあ、すみません…。

と、河原はタバコを吸おうと灰皿の前に立つ。

少女 ちよちよちよ！私の前でタバコ吸うつもり？無神経というか、気が利かないというか！

河原 吸いますか…？

少女 吸うわけないでしょ…あ、さては私のファンだな？オフのジュエちゃんが珍しいから、構ってほしいんだな？

河原 いや、知らないっす。

少女 もおろしようないなあ！パチンコ屋の営業とか行くと、あんたみたいなのばっかりよ！特別にお話してあげる。こっち来なさい。

と、少女は河原の腕をつかみベンチまで連れて来て座る。

少女 (満面の笑みで) で、何？

河原 ハイ？

少女 何か聞きたいことあるんでしょう？ファンだもんね？

河原 タバコ吸ってもいいですか？

少女 え？

河原 タバコ…。

少女 え？

河原 NSにもなってなんでそんなイタイ感じなんですか。

と、河原が言うや否や、思いっきり証書にビンタされる。

少女 次はグーでいくから…。

河原 すみません…。

少女 で？なんかないの？

河原 アイドルがこんなところで何を？

少女 ポートレース。

河原 もうとづくに終わってると思うんですけど。

少女 ぼろ負けして隣の商業施設でバカ騒ぎしてた。

河原 アイドルなんですよね？

少女 そんなに疑うなら調べたらよくない？スマホくらい持つてるでしょ？

河原 調べるほどの興味は…。

少女 (こぶしを掲げる)

河原 冗談っすよ…。

少女 アイドルって言っても、半分趣味みたいなものだけどね…。

河原 人気ないんすか？

少女 (うなだれて) そう…。

河原 殴られるかと思った…。

少女 別に。本当のこと言われたって怒らないよ。

河原 はあ、でもすごく美人だと思いますけどね。

少女 狙ってるの？STIになってそれは痛いぞ…。

河原 いや別に…。

少女 まあ、お察しのとおり、イタイバラエティ要員だから、私。

河原 はあ…。

間。

少女 「ドルルズ」ももう八年目…。一期生はもう私だけ。人気は若い子にばかり固まってる、私はもうお笑い要員よ……。顔なんて関係ないの、私が一番かわいいのに…。

河原 辞めないんですか？

少女 辞めるわけじゃないでしょ！なんで一番かわいい私をやめなきゃいけないの？グループに一番貢献したのも私なのに！

間。

少女 と、まあ、そんなテンプレみたいなキレ方しても面白くないよね。やめられない本当の理由は、他のメンバーを殺せなくなるから。そういう設定。亡霊の乗り移った人形っていうコンセプトでうまく紛らわせてる。

河原 物騒っすね。

少女 別に、本気で殺すわけじゃないし。

河原 他に何かあるんすか。

少女 アイドルとして殺す。私が人気を取り返して、元の立ち位置に戻り咲いたときに、奴らは死ぬ。私の中で復讐が完了するのよ。

河原 ちよつと目をつぶってください。

少女 は？路ちゅー？きしよい。

河原 路ちゅーっていうワードが古いですよババア。

少女 てめーより若いわ！

河原 知り合いのお坊さんに教えてもらった技があるんですよ。

少女 なんの技？

河原 なんとなく、すつきりする技………？

少女 なんて疑問形なの。

河原 とにかくやってみましようよ。目を瞑って。

少女 はぁ（目を瞑る）。

河原 手のひらに、グループのメンバーを載せてください。

少女 （両手を前に出す）

河原 そしたらそのまま握ってください。

少女 （前に出した両手を握るようなしぐさ）

河原 念入りに、おにぎりを作るように…。

少女 ……。

河原 そのまま口に入れてください！

少女 （両手のひらを口に当てる）

河原 嚙んじゃダメです、ゆっくり嘗め回して…。

少女 ……。

間。

河原 そしたらそのまま、飲み込むのも吐き出すのも自由です。

少女 (飲み込む)

河原 やけにあっさりですね…。

少女 キモいおっさんのセクハラに付き合うほど暇じゃないんで。暇だけど。

河原 なんかないですか？もやっとしたものがはれたり、何となくすっきりしたみたいな。

少女 無い。

河原 あれ？

少女 騙されたんじゃないの？偽坊主に。

河原 いやそんな…。

少女 どこの寺？

河原 いや、このバス停であつたんすよ…。

少女 なんでそれを本物のお坊さんだと思ったのよ。

河原 え、だって…。

間。

少女 別に、殺したいからと言って嫌いなわけじゃないし、諭してくれなくて結構。

河原 そうなんですか？

少女 みんなかわいしいし、私の方がかわいいけど。それぞれが、それぞれ必死に生きてるのよ。美人もブスも、ジジイもババアもガキも。人の事気にしないで、自分が生きてるように生きてればいいの。だから、自分の中で殺すし、殺されたままでいられないでしょ。気が狂いそうなくらい悔しくても、まったく何とも思っなくてなくて。

間。

少女 タバコ吸いたいんじゃないの？

河原 いいんですか？

少女 ダメだけど…。

河原 ええ…。

少女 握って飲み込んでみたら？

河原 タバコを？

少女 そう。

間。



河原 やめとく…。  
少女 なら、そんなに必要としてないってことじゃない？  
河原 そう言うものなんですかね…。  
少女 知らない。

間。

少女 え？と言うか、なんでバス乗らなかったの？

河原 いや、用事までまだ時間あったんで。

少女 何の用事？

河原 アルバイトっす。

少女 何のバイト？

河原 倉庫整理っすけど…。

少女 時給イイの？

河原 いやあ、やめた方がいいと思いますけどね。

少女 試しに聞いてみただけでしょ。

河原 夜勤なんで、悪くはないですけどね。

少女 ふーん、いいじゃん。羨ましい。

河原 何もよくないですよ、同僚？は変な人ばかりだし。夜勤で体壊すし。

少女 職業差別じゃないそれ？

河原 本人が言っても差別になるんすかね。

少女 うーん…。

河原 現場はめっちゃくちゃ寒いし、偉い人は指示すら出さないうで金貰ってるし。

少女 そんなことあるの？

河原 夜勤では珍しくないんじゃないですか？さらに偉い人もいないし。

少女 いいね、その仕事…。

河原 いいわけないでしょ！

少女 私が言ってるのは、その偉い人の仕事なんですけど。

河原 夜中にずっとだらだらしてるだけの仕事ですよ？

少女 あのねえ、一丁前にプライドなんて持つてるからそんな嘆いてんでしょ。

河原 ……。

少女 現状を嘆いてるだけの自由があるんなら、精進しなさい。悔しいのに何もできないのを他人のせいにしてるから変な坊主に騙されるわけ。いくら取られたの？

河原 五円…。

少女 はあ？そりゃ余計偽物だわ。金取ってなんぼでしょうよ。

河原 お金ってそんなに大事ですかね。

少女 そんなの人に寄るんじゃない？私はどっちでもいいけど。

河原 どっちでもいい？

少女 だって、お金に執着してたらこの年まで微妙なアイドルやってないでしょ。

河原 確かに…。

少女 納得されると腹立つなあ。

間。

少女 ま、あればうれしいよねくらい？

河原 そうですね…。

少女 というか私も仕事行かなきゃ。

河原 これからですか？

少女 そう、これ渡しとくわ。

と、少女は名刺を取り出す。

河原 また紙切れ…。

少女 なんか言った？

河原 いいえ、何も。

少女は取り出した名刺を河原に渡す。

河原 (名刺を確認して) キヤバクラですか…。

少女 おっと、うちは割と“お高級”なところだから。来るならちゃんとしてきてね。

河原 はあ…。

少女 そっちでならタバコ吸っていいから。私も吸うし。それじゃ、また。

と少女が去る。

名刺を眺めている河原。

と、バスがやってくる。

車掌 えー、こちら…。なんだっけ…。ああ、〇〇循環。××駅前です

バスから大きなポストンバックを持った男が降りてくる。

男はベンチに座り、ストレッチをする。

車掌 乗りませんね？

河原 (名刺をしまいながら) あ、はい！

車掌 出発します。

西浦 さん？河原さん？

バスが去る。

西浦 河原さんじゃないっすか！もう出勤で？

河原 西浦さん。お疲れっす、昼間の仕事が早く終わり過ぎちゃったんすよ。

西浦 あらあ、そうだったんですか！お疲れ様です！

河原 西浦さんこそ、今日、シフト入ってるんですか？

西浦 ええ、てことは河原さんも？

河原 え、ええ。そうです。

西浦 よかったあ！最近新人さん多くて、やりにくいんですね。

河原 ははは…。

西浦 そうだ！それより、ジュエちゃんが来ませんでした？

河原 はい？

西浦 ジュエちゃんですよ！「セレスティアル・ドールズ」のジュエちゃん！

河原 ……あ！いや、知りませんけど？

西浦 そっかあ、それっぽい残り香が…。

西浦は這うようにバス停をうろつく。

河原 人気あるじゃん…。

西浦 なんかないました？

河原 いえ！何も。

西浦 うむむ…。

河原 え？西浦さん、その子を探すために来たんですか？

西浦 いやいや！たまたまです、他に用事があるんですよ。

河原 仕事までですか？もうあと数時間しかないですけど…。

西浦 イベントがあるんですよ！この駅前のビルで！

河原 イベントって、いつも行ってるという彼女さんの？

西浦 他に何があるっていうんですか、写真見ますか？

河原 いや、いいです！

西浦は河原の制止も利かず、ポストンバックを開き写真の束を取り出す。

河原 西浦さん、外でああいう写真出すのはまずいですよ！

西浦 いいじゃないですか、このバス停ほとんど人来ないし！

河原 そう言う問題じゃないですよ！

西浦 （取り出した写真を河原に見せて）ほら、これは仙台のイベント、こっちは都内で握手会があった時でしょ。こっちは福岡のイベントでサインしてもらった時です。

河原 分かりました、分かったから。

西浦 これ見せちゃおうかな、どうしよっかな！

西浦は写真を持ちながらもじもじしている。

河原 もうしまっていていいですよ！

西浦 見せちゃおうかな！河原さんは仲良しだし！ほら！

と、西浦は掴んでいる写真を河原に見せつける。

西浦 これはね、ファン感謝祭であった時の写真なのよ！見てこの衣装、胸のところがほぼ全部開いてて、下も隠れてないくらいのパンティーなのよ！

河原 （ものすごく嫌そうな顔をして）ほんといいですって！閉まってください！そんな騒ぎ方してたら通報されますよ！

西浦 でもさ、でもさ、こことか見て！こここのこだわりがさ！

河原 彼女さんのおっぱい他人に見せていいんですか！

西浦 ……！！

と、西浦は急に写真をバッグにしまう。

西浦 この助平ヤロー！

河原 あんたが見せたんじゃないっすか！

西浦 バカ河原さん！断れよ！

河原 いったって言ったじゃないですか！

西浦 河原さんじゃなきゃ、ぶち殺してるところでしたよ……。

河原 落ち着いたならいいですけど……。

西浦 ぼぼぼぼぼ。

河原 （驚く）……。時間大丈夫ですか……？

西浦 え？

河原 イベントの。

西浦 まだ、大丈夫ですよ。

河原 タバコ吸ってもいいですか？

西浦 ダメですよ。臭いつくし。

河原 ですよね…。

西浦 今日は暇ですかね、倉庫。

河原 どうですかね、いつも暇みたいなもんですけど…。

西浦 また近いうちに遠征があつて、ぎりぎりなんですよ…。

河原 あー…。

西浦 ……。

河原 絶対に貸しませんよ。

西浦 さすがに、そこまで言つてませんよ。

間。

河原 あの、どうせ時間潰すなら場所変えませんか？

西浦 節約したいんで…。

河原 つすよね…。

間。

河原 ……最後に風呂入りました？

西浦 昨日、おとといの夜ですかね…。

河原 なるほど…。

間。

西浦 南条さんが正社員登用されたらしいつすよ…。

河原 え？マジっすか？

西浦 なんか、自分からそう言う話をずつとしてみたいですけど…。

河原 はあ…。そんなことあるんすね…。

西浦 ボク、就職したことないんでわかんないですけど…。

河原 え、南条さんいくつでしたっけ？

西浦 ちひはいつてなかったんじゃないかな。

河原 一番年上だった記憶はあるんですけど…。

西浦 ですね。…夜勤明けに銭湯から風俗が日課だったのに。

河原 上げえおっさんですよね…。

西浦 いやーボク風俗は、彼女に裏切ってるような気がして…。

河原 彼女って、AV女優じゃないっすか…。

西浦 はい？

河原 何でもないっす。

西浦 河原さんは、正社員とかにはならないんですか？

河原 いや、本業があるんで…。

西浦 詐欺師でしたっけ。

河原 ………………冗談ですよ。

西浦 そうっすよね、悪いことしてるのに、夜勤でバイトしなきゃいけないほど儲けてないって、悲しいですもんね。

河原 悲しいとか、そう言う問題じゃないんですけどね。

西浦 だって、詐欺するくらいなら、万引きすればいいじゃないですか。詐欺はするのに、お店で金は払う。なんか笑っちゃいますよね。律儀なのかな。

河原 そうっすね…。

西浦 でも、相手も相手で、ボクたちの上の人みたいに、下の連中をこき使って私腹を肥やしてるような奴なら、詐欺にでもかかれて思っちゃいますけどね。義賊みたいな？ 鼠小僧みたいなのを求めちゃいますよ。

河原 ですね…。

西浦 どうします。南条さんもそうなっちゃったら。やだなあ。

河原 いやですね…。

間。

西浦 まあ、ボク正社員になったらイベントとか気軽に行けなくなるんで、今のままがいいんですけどね。

河原 つすね…。

間。

西浦 イベント行きます？一緒に。

河原 はい？

西浦 たぶん人少ないんで、急にでも入れますよ。

河原 いいやいや、行きませんよ。

西浦 いいんですよ。エロは人を助ける！気分悪いんでしょ？行きましようよ。

河原 気持ちはずれいですけど…。

西浦 行かないんですか！

河原 ハハハ…。

西浦 もつたいないなあ。

河原 今日、倉庫まで歩いて行こうと思ってるんで、体力残しておかないと。

西浦 助平だなあ、河原さん！

河原 ハハハ…。

西浦 じゃあ、これだけ渡しときますよ。

河原 え？

と、西浦はバッグから紙きれを取り出し、河原に渡す。

西浦 はい。

河原 まだだ…。

西浦 なにがです？

河原 いや何でも。

河原は渡された紙きれを見る。

河原 風俗ですか…？

西浦 行つてない！ボクは行つてないですよ！あの、ほら、ティッシュ貰ったら裏に入つてたんですよ。チラシみたいな。

河原 わざわざ、とっておいたんですか？

西浦 たまたま！何となく！念のために！

河原 念のため？

西浦 イヤ!!ジョークです！ウソ、冗談。

河原 まあ、何でもいいんですけど。

西浦 ほら、南条さんみたいに、いろいろと食欲だったら、いいことありますよ。きっと。

河原 西浦さんは？

西浦 ボクはほら、意外と謙虚というか、南条さんみたいなタイプじゃないから。

河原 はあ…。

西浦 とにかく、無にならない方がいいよ、虚無に。

河原 ……。

西浦 ね？別に気にすることないでしょ。本業がうまくいってないのかもしれないけど、ボクみたいなものもあるわけだし。ね？

河原 ははは…。

西浦 じゃあ、そろそろイベント始まつちゃうから、行きますね。

河原 はい。

西浦 じゃあ、また後で！張り切っついこう！

河原 イベントで張り切り過ぎないようにしてくださいね！

西浦 それは無理！じゃあ！

と西浦が去る。

河原 はあ……。。

間。

河原 タバコ吸いてえええ！

と、バスがやってくる。

車掌 えー、こちら……。なんだっけ……。ああ、〇〇循環。××駅前です。

と、バスからサングラスをし白杖を持った少年が降りてくる。

少年は大きなカバンを背負っている。

車掌 出発します……。

少年は、白杖をつきながらベンチまで向かい、カバンを下して、座る。  
バスが去る。

間。

河原はタバコを吸おうと。灰皿に向かう。

少年 嫌なおいがする。

河原はドキツとし、そそくさとベンチに戻る。

少年 何か不思議なおいがします。混沌としたにおい。欲とか、愛とか、真理とか、いろんなものが混ざったようなにおい。

間。

河原 あの、そんなにおいますかね……。



少年 うわ！居るなら居ると言ってくさいよ、びっくりした。  
河原 スミマセン！居ます。オジサンが一人。  
少年 いえ、すみません。こちらこそ失礼しました。目が見えていないもので。  
河原 そうですよね！すみません、気が利かなくて…。  
少年 ずいぶん卑屈ですね…。そんなことないですよ。  
河原 ハハハ…。

間。

河原 あの…。

少年 はい？

河原 どこかに向かう予定ですか？お邪魔でなければ、案内しますが…。

少年 いえ、大丈夫です。特に予定はありませんので。

河原 そ、そうですか。すみません。

少年 いえ、俺の行く先が常に目的地なのです。

河原 はは…。ずいぶん達観してる感じっすね…。

少年 それは相対的にそう見えているのでしょうか。俺が達観しているのではなく、あなたが、自分自身より、俺をそうとらえているに過ぎないのです。

間。

河原 なるほど…？

少年 気にかけることはありません、人は生まれながらにして持っている器の中だけ生きられないんですから。

河原 なんか…。

少年 何でしょう。

河原 いや、なんか、なんか嫌なことでもあったのかなって。

少年 どういう意味ですか？

河原 なんか、うつぶんがたまつて、それを晴らすためにそんなことを言ってるような感じがしますよ。

少年 ……そうですか。まあ、あなたが間違ってもないかもしれないですね。

河原 いや、すみません。

少年 俺の鞆を開けてもらえますか。

河原 え？これですか？

少年 そうです。中にあるスケッチブックを取り出してください。

と、河原は言われるがままに、少年の鞆からスケッチブックを取り出す。

少年 中を確認してください。

河原は言われるがままに、スケッチブックの中身を見る。

河原 ……なんの絵ですか、これ。

間。

少年 それ、全部俺が描いたんです。

河原 え？

少年 俺が全部書きました。全部、想像して。

河原 はあ…。

少年 どう思います？

河原 どうと言われても、教養がないもんで、よくわかんないっす…。

少年 それ、一枚、数十万円はしますよ。

河原 ……え！これが！

少年 ……。

河原 スミマセン、つい。

少年 いいんです。俺にも、価値なんてわかりませんから。

河原 はあ…。

少年 すごいですよね、天災だとか、センスがあるとか、人間の後付けの付加価値によって絵の価値も上がるんです。技術もへったくれもない、言っただもん勝ちなんです。

河原 そうですね…。

少年 盲目の少年が想像で描いた空、海、大地、すべて本物とは程遠いでしょう。つまり偽物なんです、偽物の空、偽物の海、偽物の大地。それに何十万、何百万の価値が付くって、どういうことなのでしょう。これに価値を見出した人は、一体どんな世界を見ているんでしょうか。

河原 きつと、すごく感受性が豊かで、想像力があって…。

少年 (喰い気味に) 本当にそうだと思いますか？

河原 ……え？

少年 偽物に価値をつけるのがうまいんですよ。欲も、愛も、真理も、この世のすべては偽物で回っているんです。

間。

河原 でも、すごい絵だと思えますよ……。僕は素人ですけど。

少年 どこがですか？

河原 ……大切なのは「どう見えるか」じゃなくて「何であるか」だとかいうお坊さんがいました。そう言う意味では、たとえ本物と違っていても、この絵は本物の空、本物の海、本物の大地を書いているんだと思います。

間。

少年 ハハハハ！今時そんな臭いポエムを言うお坊さんがいるんですね。

河原 はあ……。

少年 なんていうか、所詮は受け売り。一番偽物なのは、あなたのセリフですよ。

河原 なん……。

少年 俺にはその絵が本物だろうが偽物だろうがどうでもいいんです。だってもう死ぬまで安泰のようなものだから。テキトーに絵を描いて、テキトーなテーマをつけて、テキトーに感情を騙ればお金になるんです。でもそれでいいんです。生きるためには本質よりも、“ガワ”が大切なんです。

間。

少年 人は、いつも偉そうに説教を垂れたがるものです。「仕事とは」「人生とは」「愛とは」

「夢とは」「お金とは」……………。そんなもの、すべて偽物なんですよ。

間。

少年 身の丈に合わない高級品を手にしてみたり、生れという不条理に立ち向かってみたり、幻の希望にすがってみたり、自分を諦めて偶像の輝きに己を捨ててみたり、流されるままにすべてを受け入れてみたり……………。

間。

少年 苦しいんですよ、本質を知るといふのは。だってそんなものないんですから。無いものを探すよりも、目の前にあるものとおままごとをするのが一番楽で気持ちいいんですよ。そうでしょう、あなたも。

河原 ……。

少年 誰もが、いつか、どこかで気づくものです。「ああ、ここから先は苦しいな。ここで

ストップしようかな」って。それでも、止まらない人間は、死んでしまうんです。……あなたみたいに、自分は優秀ではない、無能でもない、人の不幸を喜べない、でも人の成功にはそれなりに悔しがる。苦しいでしょう、スポンジのようにすべてを吸収して、吐き出す場所がないんだもの。

間。

河原 クソガキがよ！酸いも甘いも知りつくしたような口ききやがって！てめえが何万何億稼ごうが、知らねえんだよ！正論語って大人になったつもりか？世の中つてのはな、虚無が支えてんだよ。良いことも、悪いことも、ごちゃ混ぜにして、気持ち悪い泥の中でもがいてるような奴らが支えてんの！犯罪者、宗教家、フリーターとか、芸術家とか、そう言うろくでなしどもが生きてるから、お前みたいな達観ぶりやがったクソが生きてられるの！偉そうに説教してるのはお前だろうが！

間。

少年 こわあ。

河原 いや、すみません、ほんと…。

少年 いや、いいんじゃないですか。本音って人それぞれだし。それこそ本質も、人それぞれなんですよ。同じチョコレートを食べても、感じる甘さは違うように。

河原 はあ…。

少年 ここまで騒いで、見向きもされない。駅前なのに。なんか、不思議ですね。結界が張ってあるような感じ。

河原 スピリチュアルにも精通してるんですか？

少年 いや、イメージの話です。

河原 イメージ？

少年 一人でいくら騒いでも、何も世の中は変わらないんですよね。でも個人の意識が変わらないと、それはそれで世の中は変わらない。つまり矛盾してるじゃないですか。

河原 はあ…。

少年 本当は生きるのに必死なはずなのに、誤魔化し誤魔化し生きてるんです。紀元前から語られてきたような事象を、今更新しい発見のように語るんです。技術だけが進歩、発展してるけど、人つてのは変わってないんですよ。世界の進化のスピードに追い付けないんです、人は。

間。

河原 追いつく必要ってあるんすか？

少年 ハイ？

河原 だって別に、世の中の進歩に追いついていなくても、引っ張って行ってくれてるじゃないですか。その、世の中が。

少年 それはまだ、あなたが生きていますからですよ。知らないうちに、何人も振り落とされているんです。

河原 でも、別に、それこそ自分が個人として生きていられるなら別に、いいんじゃない？少年 ……………。

河原 だって僕みたいな凡人は、僕でしかないというか。僕が死んだその先とか、知らないですよ。どつかの国で戦争が起きてようが、差別が起きてようが、事件や事故が起きてようが、僕の境界の外なんです。ならそれでいいじゃないですか。

間。

と、バスがやってくる。

車掌 車掌 えー、こちら…。なんだっけ…。ああ、〇〇循環。××駅前です。

バスから、中年の女が降りてくる。

女はわかりやすいほどのブランド物の服を着て、小さい鞆を持っている。

女 相変わらず汚い街ね！汚いバスに、汚いベンチ！汚いおっさんに、汚いガキ！どきなさい、ほらほら。

間。

河原と少年は顔を見合わせる。

バスが発する。

女 どきなさいってば！

河原と少年は灰皿の前に移動する。

女はベンチにドカツと座る。

女 かー！もう嫌になっちゃうわ！

と、女はスマートフォンを取り出し、捜査している。

少年 (女に聞こえないように) まあ、だから、ああいう人もいるんですよ。

河原 (少年と同様に) なんか、納得かも…。

少年 でしょう？

河原 てか、急に委縮しないでくださいよ。

少年 いえ、たまたまです。

間。

少年 ちょっと面白いことしてみませんか？

河原 面白い事？

少年 俺も、年相応にいたずら好きなんですよ。

河原 はあ…。

と、少年は自身のスケッチブックから一枚絵を切り離し女に近づく。

少年 あの…。

女 ……。

少年 あの、すみません。

女 なに？

少年 あの、これ貰ってくださいませんか？

と、少年が女に絵を渡す。

女 (絵を受けつつって) いらないよ。

少年 でも、あなたに受け取ってほしいと思ったんです。

女 しまうところもないし、邪魔。

少年 どうしても！

女 じゃあ貰うわよ。

と、女は絵をびりびりに破り、灰皿の方に向かう。

女 ちょっと退いてもらえる？

河原 あ、ハイ。

河原は、少年のいる場所へ移動する。

と、女は破いた絵を灰皿に捨てる。

河原 もったいねえ…。

と、女はそのままポケットからタバコを取り出し、吸い始める。

少年 でしょう？

河原 でしょう？ってなんすか…。

少年 人それぞれなんですよ。全ては。

女 何？貰ったんだからいいでしょ、別に。しつこいのが悪いじゃない。

少年 いや全然！悪くないです。

女 あなたが描いたの？

少年 はい。

女 ふーん、すごい。

河原 それ、一枚数十万からするらしいですよ…。

女 はあー！すごい、まったくわからなかったわ。

河原 もったいないとか、思わないんです…？

女 そりゃ、もったいないわよ。

河原 ずいぶん淡泊つすね…。

女 別に、絵とか興味ないし。

河原 まあ、僕もそうつすけど。

女 じゃあいいでしょ。

河原 (少年に向かって) いいの？

少年 いいんじゃないですか？

河原 はあ…。

女 宝くじ当たっちゃってね。必死になる必要もないのよ。

河原 へえ…。

女 え？興味ないの？

河原 無くはないつすけど。

女 七億よ、七億。一等大当たり。

河原 はあ。

女 信じてないでしょ？

河原 そんなことは無いですけど。

女 まあ、幸と不幸のバランスっていうか、人生何があるかわからないっていうか。

河原 ……。

少年 何かあつたんですか？

女 なんて言わなきゃいけないの。

少年 一応、絵描きなんで、興味があるんです、人の話に。

河原 (小さな声で) 本当は？

少年 ウソですけど。

河原 もう…。何でもいいや。

女 なんてことない話、数年前に夫と別れただけ。宝くじなんて興味なかったけど、買ってみるものね。

河原 はあ…。

少年 でもそれだけで、幸と不幸のバランスとか言います？

女 結構ぐいぐい来るな…。

少年 せっかくなんで。

女 別れ方が最悪だったの！なんか、変なクソ高い壺みたいなの買ってきて。絶対高くなるから、とか。

河原 ああ…。

少年 何か当たりが？

河原 まあ、一応。

女 嫌いとか、不満とかはなかったんだけど、なんか怖くなっちゃって。別れたのよ。そこそこのいい歳だったのに。

間。

河原 なんか、慰める感じになってます？

少年 いや、そこまでは…。

河原 あの、お子さんは？

女 とつくに自立してる。

河原 はあ…。

間。

河原 なんか、あんまり羨ましくくないですね…。

女 何が？

河原 宝くじ当たった話聞くと、たいていは悔しかったりするものなんですけど…。

女 喧嘩売ってるの？

河原 いえ…。

少年 そうですか？俺はすごい羨ましいですよ。

女 あんたは、自分で大金稼いでるんじゃないの？

少年 あまり、環形ないと思います。金額は。ただ、宝くじに当たるという体験。高揚感、



緊張。そう言うものが、羨ましいと思うんです。日本だけで一億人以上の人がいて、毎日が生まれて、死んで。その中に、宝くじの一等を当てた人なんてほとんどいないはずですよ。

河原 そんなもんすかね。

女 なんか、言いたい放題言ってるけど、別に私にとってはどうってことない事なんだけどね。子供に、老後の心配させなくて済むな、程度よ。

河原 使つてないんですか？

女 そりや多少は使うでしょ！でも、一億すら使えてない。膨大なお金を手にしても、その人の品位とか、格みたいなのって、変わらないよ。

少年 まあ、納得と言うか。

女 そもそも、生まれながら品があつて、格式の高いお家柄に生まれる奴の方が稀よ！宝くじなんかよりよっぽど。

河原 確かに。

間。

女は一本目のタバコを灰皿にステ、二本目を吸おうとするが、さっきのタバコが最後の一本だったことを思い出す。それに気づく河原。

河原 吸いますか？

女 ありがとう。

河原は女にタバコを渡す。

少年 吸わないんですか？

河原 いやなんか、おなかいっぱい。

女はタバコに火をつけ、大きく吸い、ため息を大きく吐く。  
間。

女 一人さみしい!!

河原 (驚く)

女 仕事以外で久しぶりに人としやべった!!うわああ！怖いわ！

少年 なんかちよつとイタイ人ですね…。

河原 君もだよ…。

女 老後の話とかさせるなよなあ！

河原 自分で言ったんじゃ…。  
女 はあ…。

女は、再びため息をつく。

河原 あの、旦那さんの行方とかわからないんですか？

女 (喰い気味に) 興味ない。

河原 でも、嫌いじゃなかったんでしょう？

女 そう言う問題じゃないでしょ。四、五十で再婚とかありえん…。

河原 そう言うもんですかね…。

女 でも多分、この辺うろついてると思う。昔から、好きだったから。海に近いけど、自然な感じがなくて、人工的な、嫌な感じが肌に気持ちイイって言った。

河原 はあ…。

間。

女 ああ、そろそろ行くわ！金使いまくってやるぞ…

河原 いいっすねえ。

女 あなたも行く？連れてって感じじゃないんでしょ？

少年 俺ですか？…じゃあ、お願いします。ある程度は平気なんですけど、やっぱり人がいた方がいいので。

女 じゃあ行こう。

と、女はタバコを捨てる。

少年 それでは。

と、少年と女は去る。

間。

河原はベンチに座り、電話を掛ける。

河原 ……あ、先ほどお電話させていただいた河原と言います。ハイ、ハイ。……………  
……………えっと、明日の事なんですけど、少しばかり予定を変えさせていただけないかな  
と思ひまして。ハイ、ハイ。あの、お相手の方も、少しばかり気持ちが変わってきた  
とかで。ハイ、ハイ。保険会社との連絡が…。ハイ。ハイ。……………あの、とにかく  
明日は大丈夫ですので、ご自身から息子さんに電話するようにしてください!!ハイ、

ハイ。では、失礼します!!。

河原は、電話を切り、大きなため息をつく。

間。

河原は「うーん」と伸びをした後、灰皿に向かい、タバコを吸い始める。

と、バスが来る。

車掌 車掌 えー、こちら…。なんだっけ…。ああ、〇〇循環。××駅前です。最終バスになります…。

間。

車掌 乗りませんか？

河原 悩んでいます！

車掌 かしこまりましたあ。

間。

と、バスから車掌が降りてくる。

車掌の手には缶ビールとスナック菓子の袋。

車掌 最終バスですよ。乗りませんか。

河原 どっちがいいと思いますか？

車掌 そうですねえ、この後雨が降ると言うらしいんで、乗った方が楽かなあなんて。

河原 雨か…。

車掌 どこまで向かいます？

河原 △△倉庫まで。

車掌 歩くと、三十分くらいですかね。

河原 ですね…。

間。

車掌 何やら、ずいぶんと賑やかだったようで。

河原 え？

車掌 循環バスですからねえ。ちよくちよく見えましたよ。

河原 いやいやいや、そう言うものじゃないでしょ、循環って。

車掌 いいじゃないですか、実際見てるんだから。

河原 はあ…。

車掌 飲みますか？運転席に隠してあるんです。

河原 いや、僕酒飲めないんですよ。

車掌 意外ですねえ、大好きそうな顔してるのに。

河原 ハハハ…。

車掌 一日中ずっとバスに揺られているとね、人生についてよく考えるようになるんです。

河原 はあ…。

車掌 バスの揺れって、何だか心地いい感じがするのにな、酔って、気持ち悪くて、そんな矛盾があるんです。

河原 ……。

車掌 そう言う矛盾を乗せて、走っていると思うと、誇らしきがあって、その分不安もあつて。……ああ、でもこれって、人生そのものだなって、思うんですよ。物事にはいつも正反対のAとBが居て、どっちも間違つてない。明らかに邪悪で、非道で、体が拒否しても、間違いだとは言えないんです。……そして当然、どっちも正しくない。大勢がそれを支持していても、それに安らぎを感じても、正しいとは限らないんです。つまり、この話そのものも。みんながみんな、自分の信じるもの、あるいは「何も信じていない」ということ自体を信じて、生きています。このバスは、そう言うことに気づかせてくれるんです。

間。

車掌

七つの大罪って、あるでしょう。人を死に至らしめる罪。強欲、怠惰、嫉妬、色欲、憤怒、傲慢、そして暴食。これもまあ、宗教なんですけど、言ってみれば生きとし生けるものすべてがこれに当てはまってるんですよ。壺の男も、破戒僧も、アイドルも、エロジジイも、盲目の画家も、宝くじの当選者も、バスの運転手も、儲からない詐欺師だって。まあ、私は暴食と言うより、暴飲の方が好きですが…。

間。

車掌

ただやっぱり、そのうえで必要なものもあるんですよ。それは、選ぶということです。

Aでも、Bでも。あるいは突然Cが現れるかもしれない。

河原

あなたは選んだんですか。

車掌

厳しいことを聞くねえ。

河原

何を選んだんです？

車掌

これですよ。

と、車掌は手にしている缶を掲げる。

車掌 これは△かな、Bかな。どっちかな。

河原 ……。

車掌 選んだからって、受け入れる必要はないんですよ。何となく、気楽に。ね。

河原 選んだのなら、受け入れるべきでは？

車掌 そうかもしれない。

河原 ……。

車掌 そうかもしれないということは、そうじゃないかもしれないということ。

河原 ……。

車掌 つまりね、自分の事は、半分語って、半分黙ってるのがいいんです。それなら、ひっくり返しても、半分語って、半分黙る。人の言うことも半分信じて、半分忘れる。半分、半分。全部、半分。これすらも、半分。人の声は半分だけ。自然も文化も科学も、半分だけ。

間。

車掌 だから、考えるだけ無駄なんです。無駄なんですけど、考えちゃうんですよね。バスに揺られながら、とろけるように。

間。

車掌 乗りませんか？

河原 ……。

車掌 まだ、その気にはならない？

河原 ……はい。

車掌 まあ、それも半分。もう半分は…。

河原 ……。

車掌 雨が降りますから、足元、お気をつけて。

河原 ありがとうございます…。

と、車掌はバスに乗り込み、出発する。

河原は、灰皿の前に立ち、タバコを吸おうと、火をつける。

すると、そんなに遠くない、近くもない場所で、大きな何かがぶつかる音がする。

その方向から「事故だ」「燃えてる」「逃げろ」などと、人々が叫ぶ声。

その声は徐々に大きくなっていく。

河原はしばらく呆気にとられているがやがて考えるのをやめると、雨の音。

河原は雨に打たれながらもタバコをくわえている。

暗転。

別の日。

同じバス停、同じ時間。

河原がベンチに座っている。

と、バスがやってくる。

車掌

えー、こちら…、〇〇循環。××駅前です。お乗りになる方は前の乗車口よりお乗りください。

河原

あ、僕のものがないんで、行っちゃってください！

車掌

かしこまりました。出発します。

と、バスが去る。

河原は立ち上がり、大きく伸びをする。

河原

くうー！一本吸ってから行くかなあ！

と、灰皿の前に行き、タバコを吸い始める。

と、河原のスマートフォンに着信。

河原は電話に出る。

河原

はい、河原です。ああ！その節はどうも。お世話になりました。……ええ、ええ、今ですか？今はもう、ハイ。健全ですよ。ハハハハ。いえそんな、ええ、ええ。そこそこ稼がせてもらってます。ハイ、ハイ。……ハハハハ。ええ、ええ。お疲れ様です。ハイ。また、はい。ありがとうございます。失礼します。

河原は電話を切り、スマートフォンをしまう。

河原

ふう…。

河原は、タバコを捨て、ベンチに戻る。

そして、スマートフォンを取り出し、電話を掛ける。

河原 ……あ、すみません。配車を、お願いします。◇◇駅前バス停で、ハイ。ロータリーの、そうです。…えっと、4番の乗り場に。はい、あ、僕意外居ないんで。はい、お願いします。…失礼します。

河原は電話を切り、スマートフォンをいじっている間。

やがて、タクシーが来て、河原はそれに乗って去る。

終 (20032字)